

「教員(保育士)養成校での授業を考える — 創造的な教育者の育成をめざして —」



和歌山信愛大学 教育学部
教授 大橋 功

1. 子供を使って自分の表現をしようとしていないか？

2023年4月より、和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科に着任しました。岡山大学での12年間は小学校と中学校美術、高等学校芸術科美術、工芸の教員免許に関わる教員養成に携わってきました。それ以前は佛教大学、東京未来大学においてそれぞれ幼稚園、小学校の教員免許、及び保育士資格に関わる養成に携わってきました。したがって、久しぶりに全美協に戻って参りました。

そして、12年ぶりに幼稚園、小学校教員、保育士資格に関わる養成に取り組むようになりました。とは言うものの、現職教員や保育士の研修講師や『美育文化ポケット』の編集などに関わりながら、幼稚園、保育園、こども園、小学校などに伺い、より良い教育、保育のあり方について実践的に学ぶ機会を多く持つことができていました。

しかし、教育、保育の現場において、私が授業や研修会などで伝えてきたものとは異なる実践に出会うことも少なくありません。一口で言ってしまえば、「子供を使って自分の表現をしようしているのではないか？」と疑わざるを得ないような作品や場面と少なからず遭遇するのです。そして、学生たちの中にも、お絵かきや製作で作品をつくらせることが仕事だと勘違いしている者も少なくないのです。

私がお話するような内容は、古くは大正時代から昭和初期にかけて既に指摘されてきたことと大きく異なるものでもなく、幼稚園教育要領、保育所保育指針、学習指導要領などのどこをどのように読もうとも、領域「表現」、「図画工作」において、どのような作品を制作

させるのか、といったことは示されていません。にもかかわらず、多くの学生が誤った美術教育観を持って入学しているということは、やはり、どこかで誤った美術教育を受けてきたからではないでしょうか。少なくとも、養成校が最後の砦となって、この誤りを正す必要があるでしょう。

2. 誤った美術教育観からの解放

「私は美術が苦手です」という学生は少なくありません。「どうしてなの？」と問うてみると「下手だから」「才能が無いから」との返答が多いです。私がたくさんの紙の束を手に教室に入って来ようものなら、途端に表情の曇る学生が何人か見られます。すぐに耳に飛び込んできたのは「えー、何を描かされるんだろう？」でした。

なるほど「描かされる」と思うのです。そして「描かせたり、つくらせたり」することが造形表現や図画工作の授業なんだと思っているのです。しかも「上手に」「見栄えの良い作品」を描かせたりつくらせたりしなければならない、「苦手な私にそんなことできるはずもない」と思って怯えてしまうのです。ですから、こうした苦手意識や嫌悪感、そして誤った美術教育観から、学生をいかに解放し、これらの領域や教科の活動を適切に行うことのできる教員として送り出すことができるのかが、私の課題です。

私が担当している科目は、1年生が履修する「図画工作」（選択必修：教科保育内容の専門領域）、2年生が履修する「子供と表現」（音楽とのオムニバス、保幼コース必修：教科保育内容の専門領域）、「初等教科教育法（図画工作）」（必修：教育・保育の指導法）、3年生の「造形表現研究」（選択必修：教科保育内容の専門領域）などがあります。今回は、1年生の「図画工作」の授業を通して、まずは、美術教育への苦手意識や嫌悪感、誤った美術教育観から解放することができるのか、創造的に教育、保育に取り組める教員への一歩を踏み出させる、という視点から振り返ってみたいと思います。

3. 「図画工作」(1年生、教科保育内容の専門領域)

3-1 授業について

授業は、1回100分（2時間相当）、半期14回で行っている。初回の授業テーマである「造形活動を楽しみの軸でとらえ直す」は、従来「観察画」「生活画」「想像画」などと呼び「今日はお母さんの絵を描きたいと思います」などと先生が一方向的に描くテーマを決めて描かせるようなやり方から脱却するための考え方の転換を促す内容です。この内容は、第1回を中心に以降、一部の回を除いて毎回、座学として30分程度の時間を割いて学修します。

3-2 授業の概要と目標

シラバスに示している授業の概要と目標は以下の通りです。

授業の概要

小学校学習指導要領(図画工作科)の目標・内容を踏まえた学習指導を行うために必要な美術・図画工作の専門的知識・技能について学修する。造形遊びをする活動、絵や立体や工作に表す活動、鑑賞活動を通して、教科や領域の内容、材料や用具の扱い方など、指導者に求められる美術や図画工作の基礎基本を学ぶ。

授業の目標

子供達の心を育て、図画工作科(造形表現活動)の楽しさを味わわせると共に育みたい資質・能力を引き出し、伸ばすことのできる適切な学習指導・保育を展開するための専門的知識・技能を実践的に学びつつ、そ

の学修過程における創造的態度を発揮し、創造的思考を働かせる経験を通して創造性教育を担う力を培う。

3-3 授業の内容

3-3-1 「表現主題から活動主題へ」

第1回授業は「造形表現活動を楽しみの軸からとらえ直す」とのテーマで行いました。本授業は、小学校「図画工作」、幼稚園領域「表現」等に関する「教科保育内容の専門領域」の授業です。本学では、3年次以降保育士資格と幼稚園教諭免許の取得をめざす保幼コースと、小学校教諭免許と幼稚園教諭免許の取得をめざす小幼コースにわかれます。どちらのコースも幼稚園教諭免許を取得することもあり、基本的には幼稚園での領域「表現」における造形表現を中心に図画工作科の内容についても扱います。そこで、まずは幼児教育に焦点化したところから授業をはじめます。

一般的には、描画にせよ、製作にせよ、まずは表現すべき主題を与えて活動に入ることが多いようです。たとえば、多色の絵の具による描画を初めて経験させるような場合でも、「大好きなお母さん」などといった表現主題を与えて活動することは珍しくはありません。

表1 図画工作 授業一覧

01	造形表現活動を楽しみの軸でとらえ直す 学習活動を「楽しみの軸」(活動主題)で捉え直すことで、「〇〇を描き(つくり)ましょう」(表現主題)から脱却する。
02	今の気持ちを表そう -ドローイングとペインティング 手を動かしながら、感じて、考えて、表す
03	「なんだこれは？」 - 常識を破ることからはじまるワクワクアート 「なにをすればいいの？」からの脱却=対処的態度からの解放
04	「なんだこれは？」 - つくり、つくりかえ、つくりだす楽しさを味わう
05	おもしろい技法 -デカルコマニー、フロッタージュなど……
06	色・イロ・いろ-造形教育のための色彩楽
07	クレヨンって面白い-造形教育のための材料学
08	紙版画による表現1 -技法を知る~製版
09	紙版画による表現2 -刷り 完成・鑑賞
10	アートで SDGs -共同制作(素材の分別と活用)
11	アートで SDGs2 -共同制作(発想・構想~作品制作-材料に応じた道具)
12	アートで SDGs4 -共同制作(完成・鑑賞)
13	多様性を活かした協働による表現
14	造形的な見方考え方を働かせた鑑賞活動 - アートゲームと対話による鑑賞

しかし、ともすれば絵の具の混色遊びに走ってしまい、はじめは描いていたお母さんの姿が次第に塗りつぶされてしまいます。先生にしてみれば「もうやめて、せっかくお母さんが描けているのに！」と焦りますが「時すでに遅し」です。

このように「大好きなお母さん」といった想いを表現させたいのであれば、お母さんとの触れあいを想像することに集中できるようにしてやりたい。そのためには、使い慣れ、自在に駆使できる材料用具を使わせるほうが良いでしょう。逆に、多色の絵の具と初めて出会うような場合は、そのおもしろさや楽しさをこころゆくまで堪能させてあげる方が良いでしょう。こうした遊びを通してこそ、自由自在に色を作って使う技能が獲得できます。

このように、幼児教育としての美術では、作品づくりに目を向けた「表現主題」を掲げること一辺倒ではなく、子供の側からどのような活動を楽しむのかという「活動主題」をふまえた題材設定が大切になります。「遊びを通しての教育」という視点から見れば「遊びの軸」といっても良いでしょう。

この「遊びの軸」がどこにあるのかを明確にさせることによって題材設定の視点が定まり、教育・保育のあり方が明確になって行くのです。「活動主題」は、上記の例から見てもわかるように「材料や行為そのものを楽しむ活動」と「想像することを楽しむ活動」との2領域に大きく分けられます。

前者は、造形遊びとか〇〇遊びとかいわれるものも含み、特定の作品が生み出されることを目的とはしません。後者は、「想像の世界で楽しく遊ぶ活動」と「思いや願いを伝えることを楽しむ活動」が含まれます。さらに、造形遊びなどをしている中で、偶然発見した形や色から発想する「見立て遊び」も生まれてきます。従って「活動主題」は「(A) 材料や行為そのものを楽しむ」「(B) 見立てて遊ぶ」「(C) 想像の世界で楽しく遊ぶ」「(D) 思いや願いを伝えることを楽しむ」の4つに細分できます。

こうした考え方に基づいて、以降の授業を展開していきます。その一部についてここで取り上げてみたいと思います。

3-3-2 「なにをすればいいの？」からの脱却＝対処的態度からの解放

第3回授業は、「なんだこれは？」-常識を破ることからはじまるワクワクアート-と題して、緩衝材による造形活動に取り組みました。

学生が教室に入って生きたとき、テーブルの上には大量の緩衝材と紙皿、ウェットティッシュが置かれている。「何これ〜？」と、そもそもこの真白の物体の集まりが何なのかわからない様子。そのうちに「アレじゃない？荷物が壊れないように入れるアレ」と緩衝材であることに気付いていきます。

まだ授業は始まっていないが、ガサガサと緩衝材の山に手を突っ込む学生もいれば、触ろうともしない学生もいる。「なんだこれは？」から「何ができるのかな？」と手に取り、力を込めて潰してみたり、山をつくってみようとしたり、並べて立てようとしたりする学生もいる。「なんだこれは？」から「何をやるの？」「どうすればいいの？」「何をすればいいの？」

とこちらを見て指示を待つ学生も少なく無い。

ただ「置いてみる」ことの意味

この授業では、材料をただ学生の前に「置いてみる」ことだけで、先生は何もしないで見ていただけです。授業が始まっているのに、ただ見てだけの私に対して「何をしたらいいんですか？」と聞いてくる学生がいます。そこで、私は「今日は特になんの指示もありません。自分の席に座ったら、そこで好きに活動してください。」と伝えました。

最初はあれこれもてあそんでいた学生たちの中から「くっつくよこれ！」と、この緩衝材がウェットティッシュの水分でしっかりと接着できることに気付いていきました。「おもしろーい！」「わぁ！」と歓声があがったのもつかの間で、そのあとはそれぞれがやりたいことが見つかった様で、夢中になって取り組んでいました。

最初は「何をすればいいの？」と自分の外に正解を求め、収束的思考に走りがちな学生も、「何か出来そう」「何ができるかな？」と次第に拡散的思考を巡らせ、自分なりの正解に向けて試行錯誤しはじめました。

さらに、テーブルの上に「カラーペン」を置いてまわると、彩色が始まります。色が加わることで、できそうなものの幅が広がり、一機に具体的なイメージに向けた活動へと展開しました。

夢中に取り組む様子を見ながら、一段落したところで、お互いにどんなことをしているのか、この活動から気付いたことを共有する機会を設けます。同じ材料、水分で接合するというシンプルな方法でありながら、それぞれが見つけた素材としての特徴や魅力、つくりたいものに向けての工夫などが違っていたり、同じだったりすることに新たな気づきがあるようです。説明や見本を見せることから始めないで、ただ「置いてみる」ことで活動が始まり、そこでは拡散的思考が先行し、自分なりに求めるものに向けて創造的に取り組んできたこ



図1 水で接着できることに気付く



図2 あれこれやっているうちにやりたいことが見つかる



図3 生まれてきた多様な作品

とを実感的に振り返り理解できたようです。

学生の振り返りから

a：先生は、使い方やつくりかたの説明をしなかったが、自分たちでいろいろやっているうちに色々わかってきた。気がついたら周りの人もそれぞれおもしろいものをつくっていて驚いた。こんな授業のやり方は始めて知った。

b：子どもに「〇〇つくみましょう」という言い方ではなく、子どもが自分からつくりたいと思うように工夫することで子どもの主体性が育まれると思った。材料を渡し、自由に作りましょうと言うと私たちみたいに子どもたちもそれぞれいろんなものを作ると思います。

c：今回の授業で学んだことは、子どもの固定概念にとらわれないよう、はじめに作品のお手本を出していなかったことだ。そうすることで、子ども本来の創造性を基に作品を作り始めると考えることができた。そしてそのできた作品を保育者、教育者が褒めるといった活動が子どもにとってはとても大切であると感じた。

2クラス80名ほどの学生が取り組んだが、そのうち3名だけが学生の振り返りを紹介しておきます。aは、まさにただ置いておくだけで活動がはじまり、夢中になって取り組み、個性的な表現が生まれていたことに気付いています。今まで自分が経験した「教えること」や「指示」から始まる授業では無い方法の意味と効果に気付いているのです。bも、テーマを一方向的に与えたり、指示したりするのでは無い、環境による導入の工夫により主体性が発揮されることに気付いています。さらにcは、作品のお手本を見せることが図工などでは当たり前前の導入だと考えている多くの学生を代弁しています。そうしなかったことが子供の創造性を引き出せたのだと気付いています。授業では、こうした気づきを、次回授業の冒頭で紹介し、授業は先生が主導するものだという「常識」を破ることから、子供の主体的で創造的な学びを導くことができるのだという気づきを共有するようにしています。

ちなみに、この活動は、どの緩衝材でもできるわけではなく、コーンスターチと生分解性樹脂ポリビニルアルコール（PVA：いわゆる合成洗濯糊）を主成分とするものだけです。商品名としてはストロパック社製の「エコホールド」で、今のところ通販サイト等で購入できます。水溶性で少量の水分で溶けて接着できるので、直接水で濡らすよりも、ウェットティッシュ程度の湿り気が丁度良いようです。



図 4 紙皿まで活用 つくりたいイメージに向けて、使えるものは何でも使おうとする自由さを獲得している。

4. 子供の創造性を育てることのできる創造的な教育者を育てたい。

他にも、あらゆる機会を通じて、可能な限り創造的に学習するプロセスが体験できるように授業づくりを行っています。近年の創造性教育観では拡散的思考がクローズアップされ、収束的思考は創造性を阻害するかのように勘違いされることもあるようですが、正解を自分の外に求める、いわゆる唯一解へと導くような収束が優先することが批判されてはいますが、拡散が先行し、自らの答えを求めて探究的に収束していくことで新たな価値の創造が実現できるのですから、拡散-収束は連続して繰り返されるべきものです。こうしたことも含めて、教育のプロとして、子供の創造性を育てることのできる創造的な教育のあり方を実感的に学び習得できるように、今もなお、授業改善、カリキュラムマネジメントに取り組んでいるところです。

図5は、こども理解に根ざした創造的教育支援の7ヶ条と3つの態度として、授業を通して学生たちに伝えていることをまとめたものです。私自身がこの7ヶ条や3つの態度で授業ができているかもあります。これから先も、養成校教員同士の創造的実践の共有が出来るの良いなと思いつつ、拙い取り組みを発表させていただきました。多くの方の忌憚りの無いご批判を頂戴できればと思います。

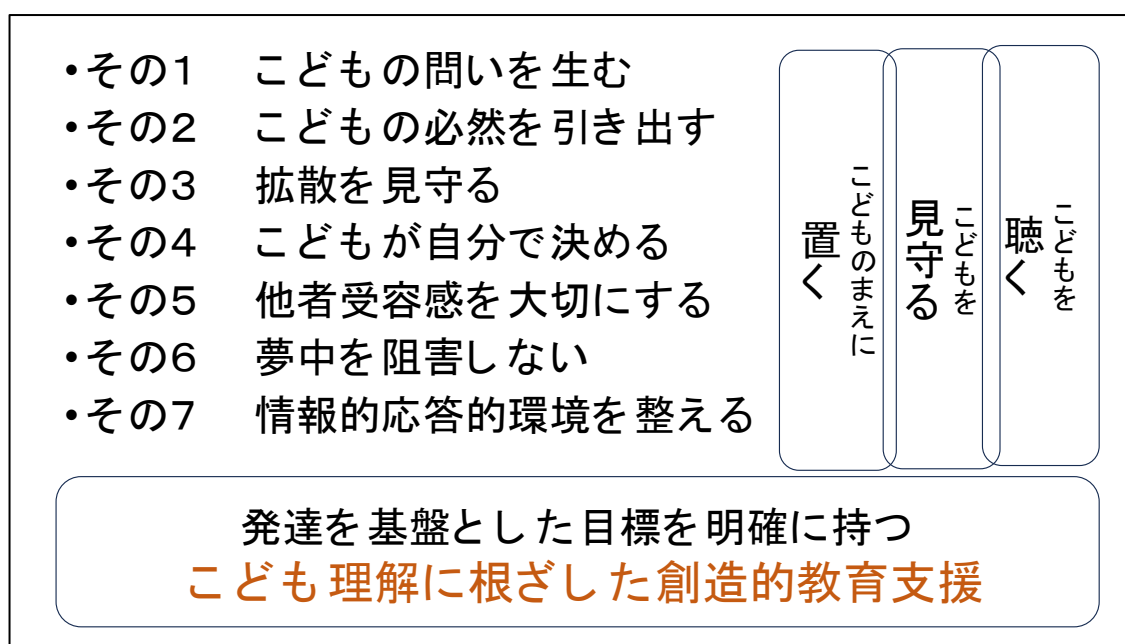


図5 こども理解に根ざした創造的教育支援の7ヶ条と3つの態度